

一 幼児の文字の習得過程

横 山 正 幸

一、研究の目的

文字の学習は、建前としては小学校入学をもって始まることになつてゐる。しかし、現実にはテレビをはじめとする文字環境の豊かさや早期的教育の重要性を強調する風潮のなかにあつて、今日多くの子どもが幼児期末までにかんがひの数のひらがなを読み、さらには書けるようになってゐる(国立国語研究所、一九七二)。むしろこの段階では、幼児は系統的な文字指導を受けていないのが普通である。では一体どのような過程を辿つて文字を習得していくのであろうか。

本研究は、極めて早い時期から文字に興味・関心を抱き、文字を習得していった一人の幼児について、両親の観察記録と幼児自身の筆記物から、ひらがなを中心とする文字の習得過程を跡づけ、その特徴的事実を明らかにしようとするものである。

二、研究の方法

(1)対象児 一九七〇年八月五日生まれの女兒(以下H児と称する)一名。なおH児の発達水準およびH児をとり巻く生活環境は、およそ次のとおりであつた。

①H児の発達水準

。弁別力 一歳四ヶ月までに小学館の育児絵本「どうぶつのおかあさん」の絵をすべて弁別し、言語的に述べ、指示することができた。

。記憶力 非常に良く、例えば三歳九ヶ月に一年五ヶ月前の事柄を明瞭かつ適切に説明するというようなことが観察された。

。言語能力 一〇ヶ月で一語発話を話し、一歳四ヶ月で二語発話を話した。発音は初期から極めて明瞭で、幼児音は二歳までにほとんど消失し、幼児語も二歳以前に消失している。

。知能 一歳四ヶ月に実施した乳幼児簡易検査によると、精神年齢は二歳であつた。また文字の読みへの関心が非常に強くなつてきた満三歳での精神年齢は、乳幼児簡易検査では、四歳六ヶ月、田中ビネー知能検査では四歳五ヶ月、WISC-I知能診断検査ではV. IQ (言語性知能指数) 一五〇程度、人物画検査法では四歳二ヶ月であつた。さらにH児が書きへの関心を強め、しきりと記号的なものを書き始めるようになってきた三歳六ヶ月における精神年齢は、田中ビネー知能検査では五歳六ヶ月、遠城寺式乳幼児分析的発達検査の知的発達の項目では六歳であつた。

。性格 非常に明朗。感受性が強い。外で体を動かしての激しい遊びよりは、屋内で絵本を見たり、積木をしたり、絵を書いたり、ごっこ遊びをしたりするのを好んだ。交友関係は普通であるが、どちらかと言うと同年のものより一〜二歳年上のもとの遊ぶのを好む傾向があった。

③ H児をとり巻く生活環境

。家族 H児が文字への関心を示し始めた時点での家族構成は、父（大学教官三二歳）、母（二八歳）、弟（二歳八ヶ月）妹（三ヶ月）、本人（二歳一ヶ月）の五人であった。

。家庭環境 父親の職業柄、学生など外部の人の出入りが比較的多い。また父親が家庭で書物に接する機会も少なくない。テレビはH児の三歳三ヶ月まで無かった。しかし、H児は一歳初期から絵本を好んだので、両親（主に母親）はそれに応じ、四歳までに約一〇〇冊の絵本を与え、読み聞かせている。

。両親の養育態度 知的事項に関して、意図的な指導はほとんど行なっていない。しかし、H児は一歳初期から身体的、活動的遊びを好まない傾向が認められたため、両親は健康上および社会性の発達上の理由から、できるだけ屋外で友だちと活発に遊ぶよう働きかけた。文字に関しては、H児が強い関心を示し、両親に積極的に質問を始めた時点では、それに答えてやるというかたちで対応したが、それ以前およびH児の質問が目立たなくなってきたからは、ほとんど本人の興味に任せ、積極的な対応はできるだけ避けるように心がけた。すなわち、両親としてはH児の興味・関心は大切にしながらも親のほうからの積極的

な方向づけは意識的に避けるようにしたのである。日常生活面での関わり方では、過保護・過干渉的養育態度を極力しないよう心がけた。なお、家庭内での話しことはの生活は大切にされ、親から子への話しかけがよく行なわれ、また子から親への話しかけにもできるだけ耳を傾けるよう努められた。

。交友関係 H児が居住している周囲には子どもが非常に多く、H児は多くの幼児と様々な場面で交流していた。しかし最もよく接していたのは隣家のS児（女児、H児満三歳当時小学一年生）とM児（女児、H児満三歳当時幼稚園年長クラス）で、この二人からは遊びの仕方をはじめ種々の面で強い影響を受けていた。

(2) 報告期間 一九七三年七月（H児二歳一ヶ月）〜一九七四年七月（H児三歳一ヶ月）、すなわちH児が文字に興味・関心をもち始めた時期からひらがなその他の文字をある程度正しく書き、書くことがH児の生活に根をおろし始めた時期までの約一年一ヶ月の期間である。

(3) 資料 読みについては、H児の父親ないし母親が随時とった観察記録を、書きについては、H児が自由に書いたもの二六〇点を主な資料とした。なお、この二六〇点の資料は、H児が今回の研究で報告する観察期間中に自発的に書いたものほとんどすべてである。

三、結 果

文字の習得過程は、読みの習得過程と書きの習得過程という二つの側面から見ることができ。したがってここでは、H児の文字の

習得過程を読みと書きの二つに分け、述べることにする。

(一) 読みの習得過程

。二歳一ヶ月初 この頃から文字への興味・関心を示し始め、両親に対してしきりと「これ何という字」などと質問する。しかし教えてやっても覚えることはできない。

。二歳一ヶ月二五日 H児の文字への興味・関心に対応し、父親が文字積木を買ってやる。H児は非常に喜び、さっそくいくつかの文字について両親に質問する。

。三歳〇ヶ月初～中頃 文字への興味・関心はいっそう強く、顯著になる。積木の文字について一段と積極的に質問する。この質問に対して、主に母親が積木の絵と対応させながら「みかんの『み』」、「かえるの『か』」、「きんぎょの『き』」というようなかたちで応答してやる。これに対してH児は文字を積極的に覚えようとする構えを示す。しかし、この時期においては、母親が逆に「み」の積木を指さし、「これは何という字」と質問すると「みかん」と、また「か」の積木を指さして同様に質問すると「かえる」というような答え方をしている。つまりH児は特定の音節を、前に学習の手がかりとして与えられた特定の語を構成している一連の音節の中から分離して、当該の文字に対応させて読むということができないのである。

。三歳〇ヶ月一四日 母親がH児の文字への興味・関心のたかまりに呼応し、画用紙で「あいうえお」五〇音表を作成して居間の壁に貼ってやる。H児は非常に喜び、文字積木よりも以後この表を利用して両親へ質問したり、自分で「みかん」「かえる」

などと言いながら、特定の文字を指示したりするようになる。

。三歳〇ヶ月一五日～二〇日 文字への興味・関心はさらに強まり、日に何回となく「あいうえお」五〇音表に向かう。そして自分なりに知っている文字を、母親や父親を呼んで指示し、例えば「み」に対し「みかん」というように読んだり、関心のある文字について、次々質問したりする。このような文字への強い関心に対応し、この時期両親はある程度積極的にH児に応じる。すなわち「これはふみの（H児の名）の『ふ』あるいは「これは『ふ』という字よ」などというかたちで文字の読み方を教示してやる。

。三歳〇ヶ月二二日 この日初めて語から特定の音節を分離させて「あ」、「お」、「し」、「の」、「ふ」、「ま」、「み」、「ゆ」、「よ」の九字を読む。これらの文字は、自分の名前、弟の名前、近所の親しくしているお姉ちゃん（M児）の名前に関係している。すなわちH児の名前は「ふみの」、弟の名前は「よしふみ」、M児の名前は「まゆみ」であった。

。三歳〇ヶ月二三日 この日「あ」、「お」、「か」、「き」、「の」、「ふ」の六文字を読む。

。三歳〇ヶ月二九日 この日「あ」、「お」、「か」、「き」、「ぬ」、「の」、「ふ」、「ま」、「み」、「や」、「ゆ」、「よ」、「ん」の一三文字を読む。

。三歳一ヶ月一日 この日「あ」、「か」、「さ」、「ち」、「て」、「ぬ」、「の」、「ふ」、「ま」、「み」、「や」、「ゆ」、「よ」、「る」、「ん」の一七文字を読む。

。三歳一ヶ月二日 この日「あ」「い」「う」「え」「お」「か」「こ」「さ」「す」「ち」「ぬ」「の」「ふ」「ま」「み」「や」「ゆ」「よ」「ら」「り」「る」「を」「ん」の二六文字を読む。

。三歳一ヶ月七日 この日「あ」「い」「え」「お」「か」「し」「て」「ね」「の」「ひ」「ふ」「ま」「み」「き」「も」「ゆ」「よ」「り」「る」「ん」の二〇文字を読む。

。三歳一ヶ月一日 この日「あ」「い」「お」「か」「し」「す」「ぞ」「た」「と」「ぬ」「の」「ひ」「ふ」「ま」「み」「め」「も」「や」「ゆ」「よ」「ら」「り」「る」「を」「ん」の二九文字を読む。

。三歳一ヶ月二四日 この日「あ」「い」「う」「え」「お」「か」「き」「こ」「さ」「し」「す」「せ」「そ」「ち」「つ」「て」「と」「な」「ぬ」「の」「は」「ひ」「ふ」「ま」「み」「め」「も」「や」「ゆ」「よ」「ら」「り」「る」「を」「ん」の四〇文字を読む。

三歳〇ヶ月二一日からこの日までのほぼ一ヶ月間で、H児は清音四五文字と撥音「ん」の合計四六文字のうち「く」「け」「む」の三文字を除く四三文字について少なくとも一度は正しく読んでゐる。しかし、一つの語（ことば）となるように配列された一連の文字を読んで、その語の意味を理解するということとは、読みが始った最も初期の段階では不可能であった。例えば母親がいし父親が「あいうえお」五〇音表の中からH児がす

でに読める「か」の文字と「さ」の文字を順次指して読ませ、その直後に何のことかと質問すると、個々の文字を正しく読め、しかも「かさ」と続けて読むことができても、一つの意味をもつた語として認知し、その意味を理解することは困難であった。こうしたことは、自分の名前に関しても例外ではなかった。語になるように提示されたいくつかの文字のまとまりを語として認知し、その意味が理解できるようになってきたのは、三歳一ヶ月の中頃である。この頃の一例を次に挙げてみよう。

祖父が入院していた「ふるや」という医院に、H児が父親と見舞に行つた。そのおり、玄関のガラス戸に「ふるや」(内側から見ている)と書かれているのを見て、H児は「ふる」「や」と自発的に大きな声で読んだ。これを聞き、父親が「何で書いてあったの」と尋ねたところ、H児は「ふるや」って書いてあった」とすぐ答えたのである。なお、H児は「ふるや医院」という名前を以前からしばしば耳にし、実際に話したことでは用いてもいた。

。三歳二ヶ月末 この頃になると、H児は文字や語だけでなく、短かい文章を読み、その意味を理解するようになってきている。

。三歳二ヶ月末～三ヶ月末 この間、H児は日頃彼女を可愛いがうてくられていた父親の友人Mさん(三二歳の女性、大学教官)から、以前もらつた養護学校(精)小学部国語科三～四学年用教科書を本箱から自発的によく取り出し、声を出して読んでゐる。H児は、この時期までに約八〇冊の絵本を持っていた。それらを母親や父親が読み聞かせてやると、H児は熱心に耳を傾

けていたが、自らの読みにあたっては、なぜかこの本だけを取
りだし愛読している。

。三歳四ヶ月末 この頃H児に東京の叔母から「江戸いろはかる
た」が送られてくる。H児は非常に喜び、さっそく両親にこの
ゲームをしようとせがむ。そこで母親がゲームのルールを教え
てやると、すぐ理解し、実際に両親と三人でかるたをしたとこ
ろ、H児は自力で五枚取る。以後かるたに強く興味を抱き、兩
親にかるたをしようと思ふことが度々あったが、両親は多忙
のため、それに応じてやることができなかった。三歳一ヶ月末
において、すでに清音のほとんどの読みを習得してしまつたせ
いか、三歳二ヶ月初〜四ヶ月末になると、表面的には以前のよ
うに「あいうえお」五〇音表に興味・関心を示さなくなつてき
ている。文字についての両親への質問も、急激に減少していっ
た。こうしたH児の状況を反映して、両親の側からも文字につ
いてH児に尋ねたり、教示を与えることはほとんどなくなつて
きている。

。三歳六ヶ月末 ごく短時間であるが、自発的に前述以外の絵本
を読むようになる。この頃になると、文字の読みは極めて安定
し、清音四五文字と撥音「ん」の合計四六文字を確実に読む。
。三歳八ヶ月末 漢字に興味・関心を抱きはじめ、二・三の漢字
が読めるようになる。

。三歳九ヶ月二日 父親および弟Y児と一緒にデパートに行
たおり、父親がY児には汽車のオモチャを買つてやり、H児に
も何が欲しいかと尋ねた。するとH児は漢字の本が欲しいと言

う。そこでH児が指定した「一年生のかん字学習ノート」とい
う本を買つてやると、非常に喜び、帰りの電車の中でしきりと
父親に読んでくれるよう要求する。父親はこれに応じ、いくつ
かのやさしい漢字を読んでやる。

。三歳一〇ヶ月末 数字に興味を抱きはじめる。例えば三歳一〇
ヶ月二十七日、H児は父親と東京まで旅行したが、そのおり乗
った食堂車のテーブル番号に強い興味・関心を示し、しきりと
「これ何という字」と質問する。また、翌二十八日には、父親お
よび叔母と皇居前を散歩したが、そのおり立ち寄つたレストラ
ンのテーブル番号に強い興味・関心を示し、テーブルからテー
ブルへと走つて番号を見てきては父親のところへ戻り、見た番
号(数字)について指で形をつくつたりして「何という字」と
質問する。例えば8については指で丸を二つつくつてくつつけ
「まるが二つこうなつたのは何という字」と質問している。

。三歳一一ヶ月初 二〇まで数えることができるようになる。

。三歳一一ヶ月中 この頃までにひらがなについては清音四五文
字と撥音「ん」の四六文字以外に「ち」を除く濁音一九文字と
半濁音五文字の合計七〇文字を読むことができる。漢字につい
ては、「木」、「木」、「森」、「中」、「小」、「雨」、「山」、「川」、
「月」、「日」、「男」の一一文字が読める。数字については、や
や不安定であるが「0」、「1」、「2」、「3」、「5」、「7」の
六文字を読むことができる。

(2)書きの習得過程

。三歳四ヶ月末 この頃からH児の描くものの中に、文字の原型

のようなものが現われはじめる(図1)。しかし文字を書くことへの興味・関心はまだ顕著ではない。

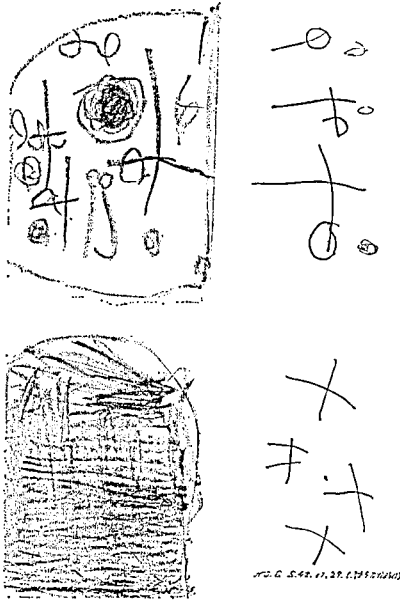


図1 3歳4ヶ月24日

。三歳五ヶ月初〜五ヶ月末 この頃H児自ら英語と称するものを頻繁に書き、父親に見せる(図2)。父親は職業柄外国書に接する機会が多いため、そのことがH児のこうした行動に少なからず影響を与えたのではないかと推測される。しかし、父親・母親ともH児のこの種の書き行動に対しては、この後三歳九ヶ月中までいっさい指示も教示も与えず、H児の興味に任せる。

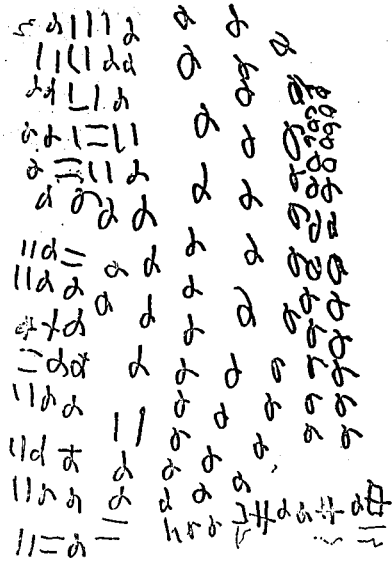
。三歳六ヶ月初〜七ヶ月初 この頃、英語と称するものに代って「の」の字に似たものをしきりと書く。最初は英語と称するものと時期的に並行して書いていたが、次には「の」に似たもの



図2 3歳5ヶ月4日

1972. 3. 24. 1. 9. (134707960)

だけを書くようになり、さらには「の」に似たもの以外に「い」および「に」の原型ではないかと推測される縦棒・横棒を組み合わせたものを同時に書くようになる(図3)。



4259. 3. 27. 3 6. 27. 27. 27. 27.

図3 3歳6ヶ月27日

この期間のH児の書くことへの意欲・関心は非常に強く、暇さえあれば紙に向かうという有様であった。しかし、両親はこれに対して積極的な対応を全くしていない。このためか、H児が書きに対して両親に質問したり、書いたものを見せに来るということは、この時期ほとんどなかった。

。三歳七ヶ月中 この頃になると、「の」に似たものは明らかに文字「の」になる。また「の」以外にもかな文字の原型と思われるものや種々の記号的なものをしきりと書くようになる。そ

の中には漢字原型と思われるものやアルファベットも含まれている(図4、5)。
アルファベットについては、この頃H児のよく接するS児・M児がこれに関心をもち、学校ごっこなど遊びの中でよく書いていた影響と思われる。



4259. 3. 27. 3 6. 27. 27. 27. 27.

図4 3歳7ヶ月9日

。三歳七ヶ月末と八ヶ月初 書くことへの興味・関心はいっそう強くなる。H児は元来、屋外で遊ぶのをあまり好まない子どもであった。このため母親が心して屋外で遊ばせるよう努めたせいだ。この時期わりと屋外で遊ぶようになってきている。しかし一旦家に入ると、紙とサインペンを持ち、まるで寸暇を惜しむようにして文字を次々に書くという有様であった。この頃に

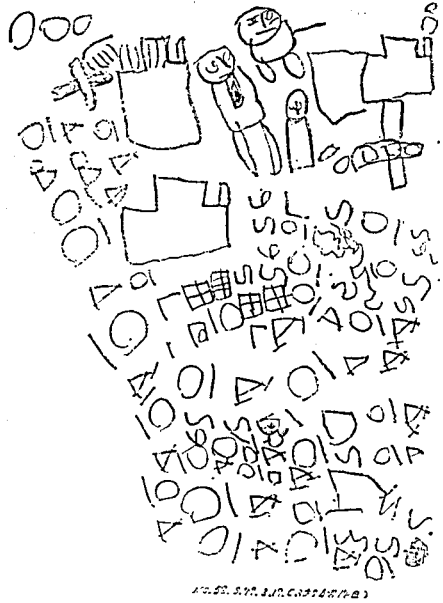


図5 3歳7ヶ月14日

なると、明らかに文字と認知できるものを書くようになる。しかし、そのうちかなりの数の文字が、いわゆる鏡映文字であった(図6・7)。この時期の資料のなかから、比較的形が正しい文字に近いものとして、次の文字を挙げる事ができる。

「ヤ」「イ」「エ」と思われる、「ト」「ウ」「エ」「ル」
 「ア」「ハ」と思われる、「ク」「ン」と思われる、「カ」「サ」「シ」「チ」「フ」
 「ハ」「フ」「シ」「チ」「フ」が、同じくこの時期の資料から鏡映文字としては次のものを指摘することができる。「の」「す」「ち」「ま」「た」「ヤ」「サ」



図6 3歳7ヶ月23日

「キ」「ハ」「ク」「ケ」「コ」前の時期、正しい「の」であったものまでがこの時期に入って鏡映文字となっている点が注目される。

。三歳八ヶ月初〜八ヶ月末 この頃になると、鏡映文字によってはあるが初めて目見は図8のようにひと続きのことは(名前)を書いている。これには「よこやまふみのよしふみ」などと書かれている。

。三歳八ヶ月末〜九ヶ月初 漢字を書き始める。それらの漢字は「中」「小」「大」「木」の四文字であった。またこの頃になると、かな文字は全体的にかな文字らしい形になってくる。新しい文字「き」「ち」が書かれる。他方、新しい鏡映文字と

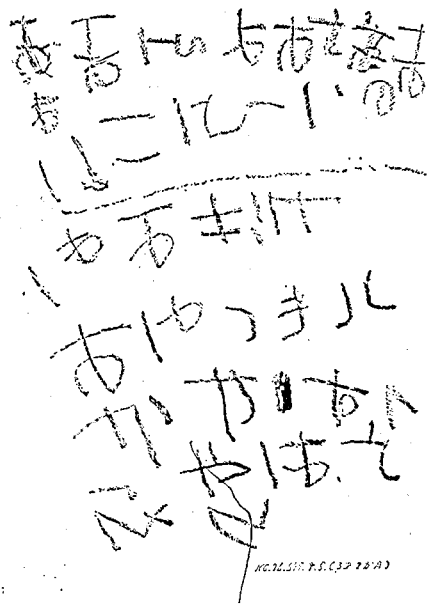


図7 3歳8ヶ月

して「ニ」「一」「一」「一」「一」「一」が現われてくる。
 しかし、その一方でそれまで鏡映文字であったものが正しい文字に修正されるという現象が起ってきている。「お」「あ」「お」「あ」「あ」「あ」「あ」「あ」「あ」「あ」の三文字がそれである。

。三歳九ヶ月初〜九ヶ月中 鏡映文字は、その大部分が比較的正しい形態の文字に修正される。そして、かなり長い文章で自分で考えたお話のようなものとか、不満・怒りなどの感情を全く自発的に綴るようになる。しかし、文字の配置は極めて任意的である。また手紙に強い興味を抱き、手紙と称するものをよく

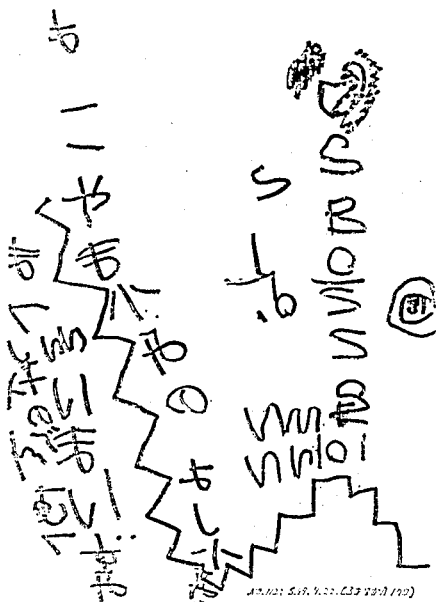


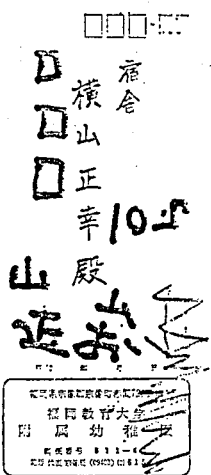
図8 3歳8ヶ月17日

書く。図9はその例である。これは父親にあてたものと思われるが、「おとうちゃんよしくん、せかくおにぎり、よしくんがこわすんのよ」と書かれている。母親がせかく紙を丸めてつくっていたおにぎりを、弟のよしくんがこわすといつて、その不満を訴えているのである。なお、図の左の部分はこの手紙が入れられていた封筒である。

漢字に新しいものが現われくる。すなわち、「本」「日」「土」「川」「三」「山」の六文字である。また初めてこの時期に数字が書かれる。すなわち「1」「2」「3」「4」「5」と思われる。「7」「01」「10」のつもりと思われるの五文字である。数字については、この後三歳九ヶ月末に「1」は

NO. 157, S. 59, S. 20 (37 24 AKB)

。「5」となり、さらに新しく「H」と「4」を書いていく。
 。三歳九ヶ月一日 この日、ほぼ正しく書けるかな文字として
 次のものが確認される。「い」「う」「え」「お」「か」



Handwritten Japanese text, including 'すのこさ いかに' and 'しんじつに'.

Vertical handwritten Japanese text, including 'おはようございます' and 'おはよう'.

図9 3歳9ヶ月15日

「き」「ん」「お」「た」「さ」「の」「り」「ん」「が」「き」「ん」「め」「や」「よ」「り」「る」「ん」「が」「き」「ん」「わ」「わ」

。三歳九ヶ月一日 以前から小学生用のノートを欲しがっていたので買ってやる。H児は非常に喜び、この後数日間このノートに文字を書くことに熱中する。また、この日H児の極めて強い文字を書く意欲に動かされ、父親はH児が幼稚園の先生に書くといって書き始めた手紙について若干の教示を与える。これは書きについて親が行なった初めての教示である。その内容は手紙の内容については一切触れず、文字配列、すなわち縦書きのことと句点についてであった。

。三歳九ヶ月末～一ヶ月月初 書くことがH児の生活の中で根をおろし始める。三歳九ヶ月一九日、この日H児は父親の勧めをうけて、初めて札幌の祖母に手紙を書く(図10)。これには、「さっばろばあちゃんびやのがきたよ。へいたいさんのびやのふきがあるよ。おばあちゃんみにきてね」と書かれている。この数日前、H児はピアノを買ってもらったのである。そしてそのピアノには兵隊の形をしたカラフルなピアノ用のはたきがついてきていた。「へいたいさんのびやのふき」とはこのことを指しているのである。この後、H児は東京の叔母、札幌の祖父、宮崎の祖母、また東京に父親と旅行したおりに家にいる母親に宛て、次々と積極的に手紙を書く。しかし、返信がくると一応喜んで読みはするが、自分が書いてポストに投函する時ほど

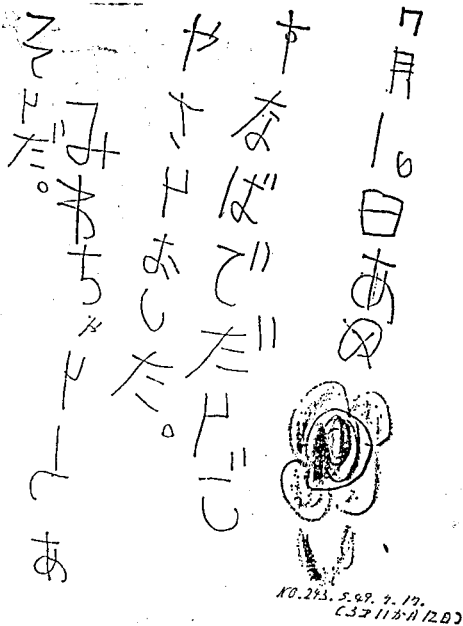


図12 3歳11ヶ月12日

みに入つたのを機会に、父親はH児に日記をつけるよう勧める。H児はこれを積極的の受けとめ、さっそくこの日から日記をつけることになる。日記の書き始めに当って、父親がH児に教示したことは、日記はその日であったこと、嬉しかったこと、悲しかったことなどを書くものだということであった。具体的内容に関してはいっさい干渉しないようにした。図12は、H児の三歳一ヶ月一二日の日記である。これには「すなばこだんごやさんをした。みわちゃん(友だちの名前)とあそんだ。」と書かれている。なお、日付(数字)については、毎回親が手本を示してあげるようにした。ところで、この時期までにH児

が書いている文字のうち、ほぼ正しい形で書けるかな文字は五四字、漢字は一〇文字、数字は六文字に達している。図13は、それらをまとめたものである。なお、枠で囲んである文字は、形態的にまだ鏡映であったり、部分的に欠けていたり、形が極端に違っていたりして、基本的に正しい文字とは認め難いものである。

四、考 察

子どもの読み書きの習得は、当然のことながら突然なされるものではない。その習得過程を詳細に観察してみると、一定の特徴的な時期を経て成立してることがわかる。むろん、ここで報告した事例はあくまでも一人の幼児の場合に過ぎない。したがって明らかにされた事実を過大に評価し、一般化することは、厳に慎まねばならないだろう。しかし、逆に過少評価するのも問題である。一人の幼児がすでに述べたような過程を辿って文字を習得していったのは事実であり、そこにはいくつかの普遍的な発達上の真実が含まれていると考えられるからである。このような点に留意しながら、以下H児の文字の習得過程を各時期の特徴的事項に基づいて段階づけてみよう。まず、読みの習得過程は、およそ次の五段階に区分される。

第一段階 文字に興味・関心を示し始める。文字についての質問

が多い。しかし、両親が質問に応じてその文字の読み方について教示しても、特定の音を特定の文字に対応させて覚えることが全くできない。

第二段階 特定の文字に対して、例えば文字「み」を読む場合、

あ か す ち な は ま が
 い き し ち ち は ま が
 う ま し ち ち は ま が
 こ を せ て と の ほ も よ
 お こ そ と の ほ も よ

10.20.3.55.16.17.18.19.20

第三段階

単独で「み」とは読めず、「みかんの『み』」のよう
 なかたちで読みが行なわれる。
 特定の文字が示す音を特定の語から分離させ、本来的
 な読みができる段階、例えば文字「み」を「みかんの
 『み』」とは読まず、正しく「み」と読むことができ
 る。

が ち ち ば ば
 ま し び び
 こ せ せ じ じ
 こ せ せ じ じ
 こ せ せ じ じ

第四段階

第三段階を過ぎると、以後の読みの習得は、極めて迅
 速である。しかし、初期では文字を読むことはできな
 い。
 も表記された語や文章の意味を理解することができな
 い。

第五段階

知っている文字によって表記されている語や文章の意
 味が読んでわかるようになる。これは読める文字（ひ

ち 1 7 川 田
 2 小 雨
 3 本 日
 4 木 中
 5 山 日

図13 3歳11ヶ月

らがな) が二〇程度になったときはじめて可能となつた。

こうして、一旦文字がある程度読めるようになると、両親への文字についての質問は減少し、表面的には文字への興味・関心は目立たないものとなつていった。しかし、その後間もなく、書くという行動が活発化してきたことからすると、この期間中H児の心の中で習得した文字の読みがいわば暖められ、確認されて、次の書きへの準備がなされていたのではないかと考えられる。

次に、書きについてその習得過程を段階づけてみると、およそ次の五段階に区分される。

第一段階 文字を書くことに興味・関心を示し始める。しかし、書かれたものはすべて描画的なものである。

第二段階 描画的なものを脱し、記号的なものを、毎日無数に書きつけるようになる。

第三段階 明らかに文字ないし鏡映文字とみなされるものを書くようになる。

第四段階 書ける文字がますますふえる。鏡映文字のいくつかが正しい方向の文字に修正されてくる。簡単なことばを綴る。

第五段階 形はともかく、かなりの数の文字が基本的な方向性において鏡映でないものに修正される。書けるようになった文字(鏡映文字も含む)で、人の名前や文章を書くようになる。

こうした段階を経ての文字の習得に、環境的・学習的要因が大き

く働いていることは言うまでもない。しかし、H児の文字習得過程の観察は、そうした要因だけでなく、個体内の成熟的要因が幼児の文字習得に強く関わっていることを示唆している。例えば、読みにおいて初期に見られた現象、つまり親が個々の文字の読み方について教示しても、ある時期までは特定の文字に特定の音を対応させることができず、文字「み」に対して「みかん」ないし「みかんの「み」」のようにしか言えないという事実や、鏡映文字について親が正しい方向を教示してやっても、初期ではほとんど一時的な効果しかもたないのに、一定の期間が過ぎると、全く自発的に修正していつているという事実がある。これらは幼児期の文字の習得が、学習的要因によって規定されるだけでなく、文字習得を可能にする内的条件の成熟と密接に関係していることを物語っている。

最後に、文字習得の可能な年齢について述べておこう。国立国語研究所報告45「幼児の読み書き能力」(一九七二)は、文字の読み書きは、四歳代から始まると報告している。この根拠に関して天野(一九七〇)は、「文字の習得とは、単に文字の音価を知ること、単に「あ」をアと読めるようになることではなく、発生論的にみた場合、それは単語の意味を捨象し、音的要素に定位し、まさに、語の有意味なコトバを構成しているさまざまな語音の中から、一定の音韻(単音文字の場合は音素、音節文字の場合は音節)を抽出して、それを文字記号として定着していく過程なのである。」と述べている。そして彼は、この行為がいつ頃可能になるかを幼児に音節分解の問題を課して検討し、三歳代ではほとんど不可能であるが、四歳代後半(特別な指導をした場合、四歳代後半)に入ると、正しく音

節を分解することができるようになることを明らかにしている。ところでH児の文字習得の開始は二歳代の末であり、三歳代の末までにはかなりの数の文字を読み・書き、さらには文章を書くことすらできるようになってきている。したがって、従来明らかにされている文字習得の可能な年齢より、これははるかに早いことになる。H児がこのような低年齢で文字を習得できた理由は、いくつか考えられるが、最も大きな理由は、精神年齢の高さにあったと考えられる。H児が文字に興味・関心を示し始めた時期の精神年齢は、特別の指導のもとで、音節分解が可能となる四歳二ヶ月から四歳六ヶ月の範囲にあった。また、文字の書きへの関心が高まり、種々の記号的なものを書き始めた時期の精神年齢は、五歳六ヶ月から六歳の範囲にあった。この事実は文字の習得能力は、生活年齢に依存しているのではなく、精神年齢に依存しているのではないかという予想を抱かせる。

事例を重ね、今後さらに精密に検討してみるべき問題であろう。

引用文献

- ・天野 清 一九七〇 語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習 教育心理学研究 第一八巻 第二号 一一一—二五。

- ・国立国語研究所 一九七二 国立国語研究所報告45 幼児の読み

書き能力 東京書籍

(福岡教育大学助教授)